



病院経営とパリアン(15)

医療法人社団パリアン理事長
川越 厚

病院再建のために具体的に行ったこと

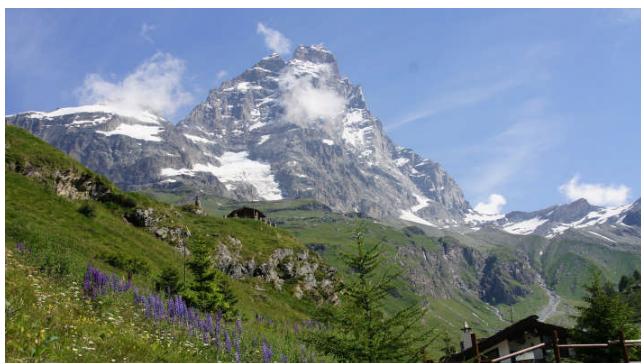
3. 地域医療の推進



“地域に仕える”は賛育会創設の精神であるが、賛育会病院ほどの規模になると“地域医療推進”という旗を掲げても、実際に地域の中へきめ細かく入りこむことには無理がある。とは言え、賛育会の法人の動きを見ながら、いつも疑問に思っていたことがある。

それは法人の仕事が行政の下請けになっている傾向が強いことと、組織保持を最優先した形で事業計画を立てていることである。本当に地域のことを考えているのか？組織が大きくなったので仕方ないと言えば仕方ないが、首を傾げることしばしばであった。

地域医療の推進は、私が病院長として掲げた三つの目標理念の一つである。賛育会と言う組織を超え、地域に対して病院職員が目を向けてほしい、と願いを抱きつつ、国の施策を見据えてのかじ取りであった。効果は多く期待できないかもしれないが、病院再建につながればと言う読みもあった。



訪問看護ステーション開設

大病院が地域に入るといふ課題を考えるにあたって、僕の頭の中には外来部門の分離独立(診療所を別個立ち上げる)ということと、訪問看護ステーションの新設という二つの構想があった。詳しい説明は省くが、最終的にはそのうちのひとつの“訪問看護ステーションを開設する”という目標は実現することができた。

開設にあたっては、今は亡き当時の事務長に大

変な労苦を強いた。この事務長さんは都の担当部署まで直接出向き、具体的な手続きを行ってくれたのだ。僕の熱意に賛同しての(あきらめての?)陣頭指揮であったが、病院全体へ与えた影響は大きかったと思う。

また開設の準備にあたってくれた二人の看護師と初代所長の看護師は、やはり僕の掲げるホスピスケアや地域医療の理念に共鳴し、賛育会病院へ就職してくれた人たちだった。それまでの病院職員へこの仕事を委ねることは、あまりにも荷が重かった。

地域に対するPR –“1.2のさんいくかい”の創刊–

“1.2のさんいくかい”は賛育会病院の広報編集委員会(現CS委員会)が発行する、患者、家族や地域の人などを対象とした病院広報誌である。創刊が1995年7月28日で、2016年6月17日に第222号が発行されているので、ほぼ毎月発行されたことになる。

“1.2のさんいくかい”の大きな特色は、病院からの公的な情報発信であるにもかかわらず、発行元が広報編集委員会の名となっている点である。職員の自発的な発意で誕生したことが僕にはうれしかった。院長の指示によるのではなく、職員の発意から生まれたPR誌。これは非常に重要な意義を持っていると思う。

病院などの経営は確かに病院長以下の幹部職員の大きな責任であることは間違いないが、それが職員の熱意に支えられて初めて力となる。今のパリアンの広報を考え

るとき、この“1.2のさんいくかい”が大きなヒントを与えてくれたことは間違いない。

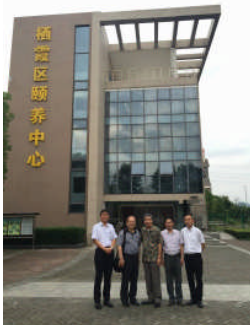


南京講演の旅と“いきいき在宅クリニック”訪問

日本の在宅ホスピス緩和ケアの話に聞き入る 南京の受講者

講演で久しぶりに忙しい時を過ごした。

6月28日から7月1日は、中国の愛徳基金会主催のホスピスケア・トレーニングセミナーの講師として南京へ行った。初めての中国旅行が南京なので、僕にとっては重い旅であったが、非常に友好的な歓迎を受け安堵した。中国の発展は目覚ましく、その勢いを肌で感じる旅であったが、同時に社会保障は国民に十分行き届いていないような印象を強く持った。社会体制が全く異なるので我が国の制度を細かく話してもしかたないと思い、末期がん患者が自分の家でいかに豊かな生を全うし亡くなっていくかを、事例を通して紹介した。セミナー参加者はキリスト教慈善団体が経営する高齢者施設の施設長など60名だったが、僕の話に熱心と言うよりも食い入るように耳を傾けてくれ、終わってから多くの質問があった。秋には、医療者を対象としたセミナーを開くとのこと。再訪を約して帰国の途に就いた。



南京セミナー会場（左）と
講演の様子（上）

いきいき在宅クリニックとの交流・在宅療養支援診療所全国大会参加

7月2日(土)から3日までは、名古屋にいた。

2日の土曜日は4名の看護師とともに、知多半島の大府市にある「いきいき在宅クリニック」を訪問した。私たちのところで2年間在宅ホスピスケアを学んで長寿医療研究センターの近くで開業した中島一光先生のクリニックである。



「いきいき在宅クリニック」と
パリアンとの交流会にて

開院祝いを兼ねたスタッフ同士の交流会で、中島先生は開院後の活動を報告してくださり、パリアンで学んだことを彼の地で実践されていることに対して、僕たちはみな感動した。この会には地元の医師、薬剤師、長寿医療研究センターのスタッフも参加し、大変賑やかで楽しい時間を過ごすことができた。パリアンの看護師はクリニックの看護師長（パリアンで2か月研修した）との再会を喜ぶとともに、地域の仲間の中に積極的に入って交流を深めることができた。

7月3日は名古屋で開かれた「在宅療養支援診療所連絡会第4回全国大会」のランチョンセミナーで「在宅緩和ケアにおけるモルヒネ持続皮下注射」について講演した。多分「弁当がおいしい」ためだと思うが、300人定員の会場がほぼ埋め尽くされた。僕がテクニカルなことを講演することは非常に稀。このテーマで話すのは初めての経験であったが、スライドを準備しながら楽しい時間を持つことができた。(川越厚記)

訪問看護パリアンの3人のリーダーを紹介します

訪問看護パリアンには3人のリーダーがいます。今年から管理者の仕事を3人で分担してステーションの運営にあたっています。パリアンで働いて4年目の、在宅ホスピス緩和ケア領域ではベテランのナース達です。訪問の予定を立てたり、患者さんたちへ、ケアが充分になされているか、スタッフからの報告を受けて確認したり、地域の会合に参加したり、新人の相談にのったり、パリアンチームがうまく機能しているか気を配ったり、リーダーの仕事はそれ以外にも多岐にわたります。3人の持ち味をいかしながら力を合わせてパリアン緩和ケアチームを動かしています。

3人とも訪問看護が楽しいと言います。家で最期の時を過ごす人と家族を支えるのは大変なことが一杯です。その大変さを乗り越えて訪問看護が楽しいという3人のリーダーを私は尊敬し誇りに思っています。皆さんも機会あるごとに3人にエールを送って下さい。(看護部長 川越博美)



訪問看護パリアンのリーダー

パリアンは、在宅ホスピス緩和ケアの研修・実習を受け入れています

パリアンは在宅ホスピス緩和ケアの研修及び学生実習を受け入れています。7月期は、7月1日から29日まで帝京大学医学部附属病院の研修医1名の研修と、7月25日から29日まで東京大学医学部の学生4名の公衆衛生学衛生学実習がありました。

研修医の春山先生は医学生のとときに当院で実習を受け、今回の初期臨床研修の地域医療(1ヶ月)でも当院での研修を選択しただけに、とても熱心に取り組んでくださいました。

東京大学の医学生(5年生)はわずか1週間の実習でしたが、これまでの病院での実習では、患者さんと医師を見るだけであったのが、パリアンの実習では自宅で過ごす患者さんとそのご家族に接したほか、医師と共にケアを担う訪問看護師などの他の職種や、ボランティアの役割にも触れることができ、とても勉強になったとのことでした。

パリアンでは以前、医学生と看護学生の実習期間が重なったときは合同で実習を行い、一人の患者さんを医学生・看護学生の混合グループが担当してケアの方針などをディスカッションし、お互いの役割やチームケアについて深く学ぶ機会がありました。

医師・看護師・ヘルパー・ケアマネジャー・ボランティア...と多職種によるチームケアを実践しているパリアンとして、今後も在宅ホスピス緩和ケアで重要な要素の一つであるチームケアについても十分に学べるような研修・実習の充実を目指していきます。



医学生・研修医・パリアン看護師のディスカッションの様子

貴重な体験を積みました

帝京大学医学部附属病院 研修医 春山輝亘

在宅緩和ケアの研修を受け、特に印象的だったのはそれまでの病院研修と比べて患者さんに残された時間がとても短く、家族の立ち位置が近いため、今までとは考える内容が違うということでした。また病棟当直で点滴、酸素マスク、モニターにつながれ、全身むくんだ患者さんの心肺が停止し、連絡を受けた家族が1時間かけて来るのを待ってから死亡確認をしたことのある私は、家族から呼吸が止まったと連絡を受け、何にもつながることなくすっきりとした姿で亡くなられた患者さんを見てここまで違うのかと衝撃を受けました。

もともと在宅緩和ケアに興味がありこの道に進みたいと考えていましたが、そのためにもがんはどのように症状が進むのか、病院では何ができるのかということを知っていなければならないことが分かりました。病院だけでは決して知ることのできなかつたことを、身を以て学べたことは私にとって大きな収穫です。この道に進むためにも今しばらくは病院で勉強していこうと思います。

あっという間の1か月でしたが貴重な経験を積みさせていただきました。パリアンスタッフの皆さんに心からお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

患者さんからのお手紙

「パリアンの皆さまへ 一旦のお礼状」

お世話になりはじめてから4ヶ月近くなりました。

私は、この間に何故か大变身し、今では「明るく楽しい末期がん患者」を自称しています。

末期がんで在宅で緩和ケアを受けるということ私なりに想像していましたが、この4ヶ月はそれとは全く異なる日々です。様々な苦痛が軽減していくとともに、私自身が明るくなり、来客を心待ちし、会話を楽しむ、こうやって子供や友人、元同僚らに手紙を出す、夫婦の会話にも穏やかで時には笑いがあります。(中略)

私の大变身はパリアンのおかげと思うことがあります。その一つが「握手」です。

病院を退院したその日に先生と訪問看護師さんによる訪問開始となりました。最初の打ち合わせが終了した時、看護師さんが手を差し出され握手を求めてきました。そして「これから一緒になって、やっていきましょうね」と言われたのです。突然に、でもごく自然でした。その時私は「やっと帰ってこれた」「末期なんだ」「がんとは闘わない、でも痛みはとってもらえる

ようだ」など断片的に考えながら、そこに居たと思います。そこに「一緒に」と言われ握手され、「がんばりましょう」ではなく「やっていきましょう」と言われたことに反応したのだと思います。からからだった心に水がしみ込んでいくような気分になっていたのです。

手と手を握って話すことが、こんなにも心に響くことなんだと知りました。そして、これなら自分だってできるかなと思ったんです。

ここをきっかけに、過去の自分とこれからの自分のせめぎあいになっていきました。そして、今や私は握手魔です。

パリアンでは、多くの方が握手されますね。いたずら心で初めて訪問診療に見えた先生に握手を求めたら、エツという顔をされました。それを見てちょっと愉快になりました。パリアンの訪問看護をはじめとする働きかけが、生命の終わりを迎えつつある人間の变革を促し、支えてくれていることに素直に感謝します。

患者さんのご承諾をいただいて掲載しております。

平成28年度第2回ボランティアの集い

平成28年度第2回ボランティアの集いが7月16日にパリアン研修室で18人のボランティアが出席して行われました。今回の研修テーマは、「グリーンケアの学び」で、ご遺族の立場でもあるボランティアの平岡達夫さんに「家族を自宅で看取った経験」をお話していただきました。

その後、家族を看取った同じ体験者からの感想や皆の意見の交換をして、「先立つ親が心残りのないように、そして子どもが愛する人の死から一日も早く立ち直り、前向きな人生を送れるように」との願いを綴った、文・堂園晴彦氏、絵・葉祥明氏の絵本「水平線の向こうか



ら」(明月堂書店)の朗読を皆で聴きました。

川越厚の「日曜患者学校」・「大人のラヂオ」

ラジオ NIKKEI のホームページで、川越厚医師が出演した番組をオンデマンド(録音)で聴くことができます。

日曜患者学校

<http://www.radionikkei.jp/inochi/>

・川崎幸病院 放射線治療センター副部長 加藤大基先生との対談(7/24 放送分)

ラジオ NIKKEI 大人のラヂオ

<http://www.radionikkei.jp/otona/>

・落語家の立川らく朝さん・篠崎菜穂子さんの番組ゲストとして出演(7/15 放送分)

・日本赤十字社医療センター 化学療法科部長 國頭英夫先生との対談(7/22 放送分)

パリアン・スタッフの講演予定(確定分)

講演者	開催日	講演会等	演 題	会 場
川越厚	9/3	NHKカルチャー	老いと死に打ち克つ知恵の勧め	NHK 文化センター青山教室(東京都港区)
川越厚	9/10	八幡薬剤師主催講演会	病なかばなのに、医師から治療中止を宣告された患者さんと家族へのアドバイス 医療者はその苦しみとどう向き合うべきか	九州国際大学 KIU ホール(北九州市)
川越厚	10/4	愛恵福祉支援財団主催公開講座	在宅でのホスピスケア どのようにして家で穏やかに死ねるか	北とぴあ(東京都北区)
川越厚	10/7	第5回パリアン公開講演会 詳細は次頁	ひとり暮らしでも最期まで安心して家で過ごすには	すみだリバーサイドホール(墨田区)

パリアンのフェイスブック(<https://www.facebook.com/hospice.pallium>)でも講演予定を随時ご紹介しています。

8月・9月のボランティア活動予定

- ・訪問ボランティア:(訪問ミーティング)8月5日(金)午後1時30分~3時
(9月のミーティングは休み)
(勉強会)8月5日(金)午後3時~4時30分
<アロママッサージ>
- ・サロン・ド・パリアン:8月5日、19日、26日(12日休み)
9月2日、9日、16日、23日
- ・命日カードボランティア:8月・9月は休み
- ・手作りボランティア:9月5日午後1時~
- ・事務ボランティア:9月17日(土)午後1時~(8月は休み)



編集後記

パリアン通信の内容の充実を図る目的で毎月発行から隔月発行に切り替えて2号目になりますが、読者の皆さまはどのように感じているでしょうか。パリアン通信は、医療法人社団パリアンの広報紙としての役割を担っており、パリアンの理念のもとにパリアンの歴史を刻むものとして、その時々パリアンの活動をわかりやすく伝えていきたいと思っております。また、読者に愛されなくては発行する意味を持ちません。テレビ小説で話題の「暮らしの手帖」は、常に読者側に立った企画を追求して読者に支持されてきました。我々編集部も、パリアンのスタッフやボランティアの日頃の活動をお伝えするとともに、読者に関心を持ってもらえる企画で紙面を刷新していきますので、パリアン通信についてのご意見やご希望の企画などをお寄せいただきたいと思います。読者の皆様の一層のご支援とご鞭撻をよろしくお願いいたします(I.E)